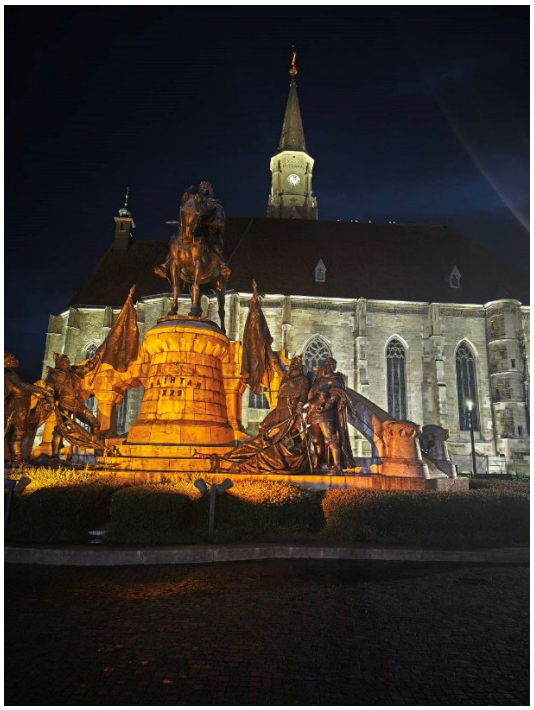
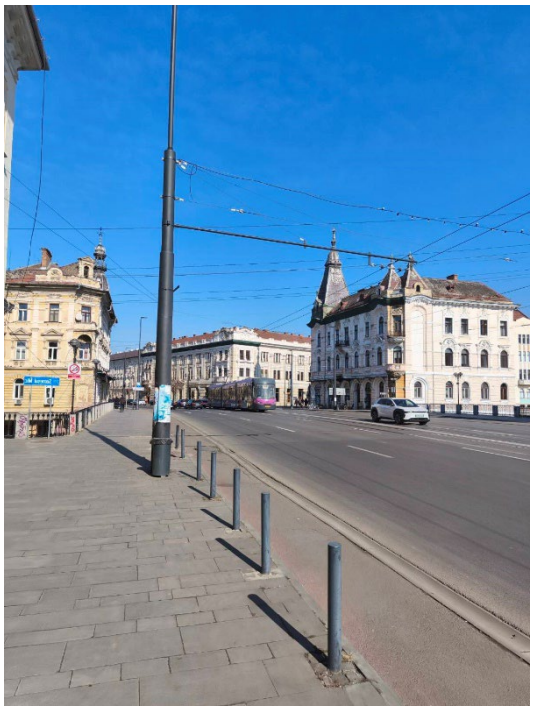
ルーマニアで見つけた、文化外交への道　―バベジュ・ボヤイ大学留学報告書―

氏名	佐藤晴彦
学部/研究科・学年（留学時）	法文学部　2 回生
留学国名	ルーマニア
留学期間	5 ヶ月
実施年月	2025 年 2 月 21 日～2025 年 7 月 28 日



街の中心部にある教会



クルージュ＝ナポカの街並み

１．はじめに

私は 2025 年 2 月から 5 か月間、ルーマニア北西部クルージュ＝ナポカにあるバベジュ・ボヤイ大学に交換留学生として在籍した。この留学は「愛媛大学海外派遣(長期)奨学金」に支援なくして、実現できなかったものである。支援いただいた関係者の皆様ありがとうございました。

２．留学をしようと思った理由

私はルーマニアに行くまで海外経験は皆無であった。ただ「大学生のうちに留学をしたい」という思いを抱いていた。当時将来は教師になりたいと考えており、留学を通じて多様な経

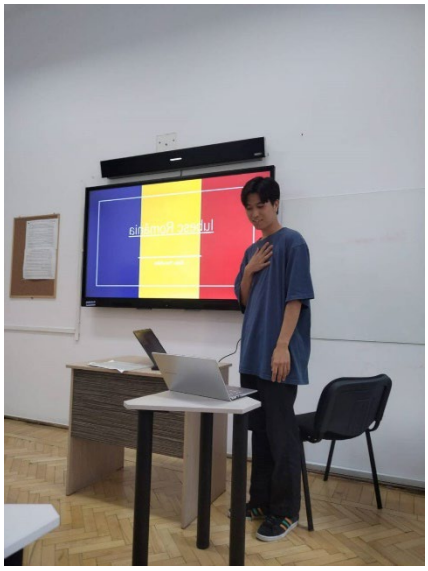
験を積むことで広い視野を持った人間に成長できる。そしてそれが自分の教師としての幅を広げることに繋がるのではないかと考えていた。

３．その大学を選んだ理由

留学先を選ぶ上で私が最も重要視したことが「日本人が少ない環境」であった。自分の性格上、日本人の学生が大勢いれば彼らに頼ってばかりになり、自分の成長に繋がらないと考えた。せっかく留学をするのならば、より多くの困難にぶつかり、それを楽しみながら乗り越えたい。そんな挑戦的な思いがあった。またクルージュ＝ナポカはルーマニアの学術や文化の中心都市で知られ、特にルーマニア国内最大の総合大学であるバベジュ・ボヤイ大学には多くの留学生が在籍していることも大きな魅力であった。異なる文化的・歴史的背景を持つ人々との対話を通じて、異文化理解や異文化共生についての深い洞察も得ることができると考えた。

４．留学先で学んだこと（授業の様子）

私は国際関係や留学生向けのルーマニア語の授業を受講した。特に国際関係の授業は愛媛大学で学んだ際と視点が異なっていて大変興味深いものであった。日本とは異なり、隣国と地続きであるという地理的要因、特にルーマニアは北側にウクライナがあるという状況もあってか、クラスメイトはより切迫感と当事者意識をもって授業に臨んでいた。そして日本で国際関係を学ぶ際は日本を中心に据えがちであるが、ルーマニアでは当然、ルーマニアやヨーロッパが主語であり、日本はあくまでも極東の国として扱われる。その違いから、国際関係を捉える上ではどこを主語にするかによって見え方が大きく異なるということを理解した。



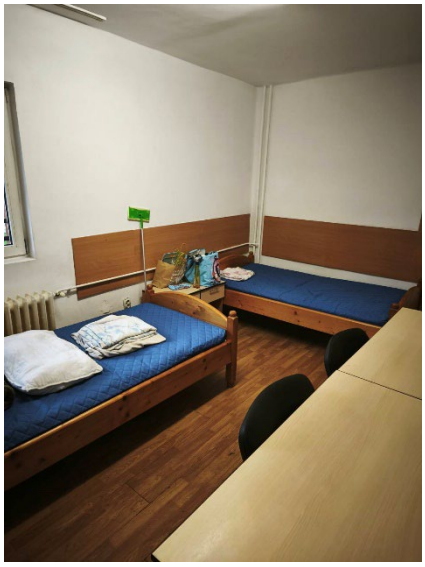
ルーマニア語の授業の様子

またルーマニア語の授業は初学者向けの講座でありながら、とにかく「話すこと」に重点が置かれ日本で経験した外国語学習とは異なるスタイルであった。日本人が英語を話せないと理由として間違えることを恐れすぎているということがよく言われる。しかしクラスメイトは間違えることなど全く恐れておらず、それどころか一単語でも多くルーマニア語を話そうという心意気が見えた。彼らの能動的な学習姿勢から多くの刺激を受け、私も可能な限り授業中、そして日常でルーマニア語を使う努力をした。まだまだ初歩的な単語や挨拶を覚えただけで会話ができるレベルにはほど遠い。それでも今後も英語だけでなくルーマニア語の学習を続け、友人たちを驚かせたい。

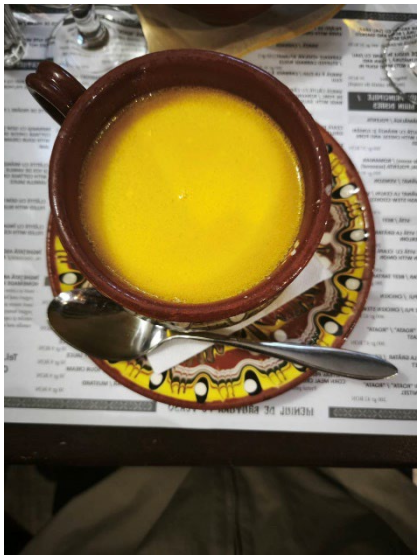
5. 現地での生活（住まいや食事）

現地では大学が提供する寮で生活した。ルームメイトとの二人部屋であったが、彼が自分が到着後1カ月で留学に行ったこともあって、ほとんど一人暮らしのような生活であった。寮費は月8000円ほどで、水回りやキッチンも整っていたので生活に特段困ることはなかった。一方で寮のすぐ近くにパブが立ち並んでたため、特に週末は深夜まで騒音が響き、なかなか寝付けない日もあった。一人の時間をしっかり確保できた反面、もう少しルームメイトと時間を共にして、友情を深めたかったという心残りもある。

食事は基本的には自炊をしていたが、友人と時間が合うときは外食したり、家に招待してもらって食事を共にすることも多くあった。ルーマニアの食事は非常に美味しいと個人的には感じた。レストランでの食事は日本より割高に感じたが、ヨーロッパという土地柄もあってパンやピザなどは本当に美味しかったです。またチョルバ(酸味のあるスープ)やサルマーレ(ロールキャベツに似た煮込み料理)といった伝統料理はどれも本当に美味しく是非これを読んでいる皆さんにも食べていただきたい。また食前にツイカという蒸留酒を飲む文化など、食事文化を通じた文化体験も楽しむことができた。



寮の部屋の様子



Ciorbă de burtă
(チョルバデブルタ)

6. 留学先での学びや気付き

留学中、最も嬉しかったことは日本から遠く離れたルーマニアという地で、本当に多くの人が日本に興味を抱いていると知れたことである。私は幸運なことに、日本文化センターを通して日本のプロモーションや、日本語教師ボランティアに毎週参加させていただいた。こうした活動で多くの外国人と関わる中で、日本国内で語られるネガティブな側面だけでな

く、日本が持つ魅力の大きさを再認識することができた。また現地では差別を経験することは一度もなく、むしろ「Eu sunt japonez (私は日本人です)」というと多くの人が喜んで歓迎してくれた。

私は現地で生活する上で「自分が外交の最前線にいる」よいう意識を常に心にもち五カ月を懸命に過ごした。この言葉はクルージュに到着後すぐ、現地に 20 年近く住んでいる日本人の方からいただいたものである。日本人が少ない環境だからこそ、私自身の言動がそのまま「日本人」のイメージとして捉えられる。もし私が不誠実な言動を取れば、日本人全体が無礼な国民だと認識されてしまうかもしれない。私が現地で歓迎してもらえたのは、先人たちが作り上げてきた日本人のイメージのおかげである。だからこそ自分は人として恥じない行動をしようと心がけ、日本にいるとき以上に当たり前のことを当たり前にすることを徹底した。

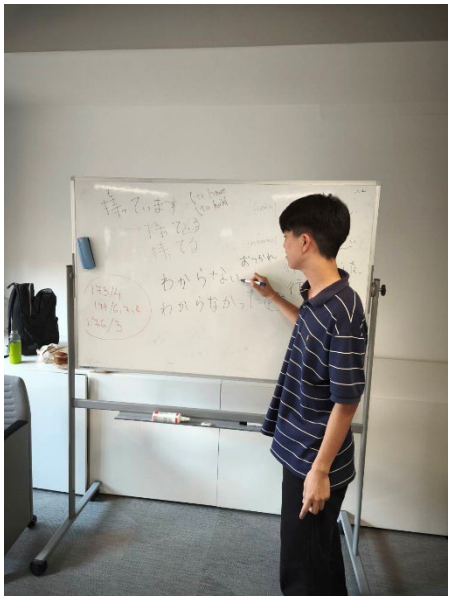
また五カ月を通して、言語はあくまでコミュニケーションツールの一つに過ぎないということを再確認した。日本文化センターの活動の一環として、幼稚園を訪れた。ルーマニアは英語力が比較的高い国であるが、園児の多くは英語を話せず、自分もまだまだ会話ができるほどのルーマニア語力を有していなかった。しかし言葉が通じなくとも「伝えよう」「理解しよう」という気持ちがお互いにあればコミュニケーションは成立するのである。もちろん言葉が通じないことは大きなストレスである。それでもこの経験をしたことでどこの国に行っても生きていけるという確かな自信を得た。

５．終わりに

留学を終えて、クルージュナポカでの留学という選択は大正解でだったと心から思う。今まで生きてきたなかでもっとも濃く刺激的な 5 か月間であったと断言できる。留学に行く前は漠然と過ごしていた大学生活だったが、この地で将来の目標が明確になった。文化センターの活動を通して関わった人々、友人や先生、旅行先で出会った人たちなど、留学中に出会った全ての人との対話を通して、今まで気が付かなかった自分の強みや価値、自分の興味関心を深く認識することができたのである。

留学前は「教師」になりたいと漠然と思っていたが、この 5 か月間を通して私は国際協力、ひいては文化外交という分野に携わりたいという明確な志へと変化した。世界から戦争や紛争をなくすことは出来ないし、すべての人を飢餓や差別から救うことも不可能だろう。それでも各国が持つ文化や価値観、言語といったソフトパワーを通して、人々は心を繋ぎ、笑顔になる瞬間は必ず存在する。この信念は単なる「綺麗ごと」や「夢物語」ではなく、日本文化センターの活動時に年齢、性別、国籍問わず多くの人々の笑顔に触れた、かげがえのない経験によって育まれたものである。この経験こそが私の夢を変えるきっかけとなった。今後、この文化外交という分野をさらに探求するため、大学院への進学を志望している。この夢の実現に向け、一層精進したいと強く思う。

これで私の留学レポートを終えたいと思います。このレポートが留学に迷っている誰かの背中を押すものになれば嬉しく思います。そして留学説明会や国際交流イベントにも参加して、私の学びを還元したいと思います。最後に、私一人の力では留学生活をこれほど有意義なものにすることはできませんでした。留学前後、留学中に私を支えて、多くの学びの機会を与えてくださったすべての皆様に、今一度心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



日本語教師ボランティアの様子

クルージュで最大のイベント
”Zilele Clujului”

バレーボール大会の様子

旅行で訪れたシギショアラ